

波動進化する世界文明 1980年 博進堂

村山 節 (むらやま みさお)

国策研究会嘱託、協同主義協会理事、エコノミスト誌同人、
外務省非常勤務嘱託、文明法則史学会代表、文明評論家

文明サイクル(CC)と社会秩序(SS)の関係

今まで文明を論じた文明史家や学者のほとんどが、文明と社会秩序の不可分の深い関係に気づいていない。また社会秩序を研究した社会思想家や学者のうち、社会秩序と文明との、切っても切れない相互依存関係に気づいた者は稀である。実際は文明秩序は、バイオ社会波の定型波をなす社会秩序の集合なのである。それもバイオ社会的集合なのだ。文明は個人の集合であるよりも社会秩序の集合なのだ。個人の集合……組織的大集合が社会秩序を形成し、その社会秩序の組織的集合が大文明となっている。社会秩序は文明の大きな潮流のなかで連環形スパイラルをなしている。それを中心として無数の社会的、民族的、個人的な渦巻く流れが存在している。

文明の内部構造を理解しなければならない。逆説ではなく今日の時代のひとは、人間社会と文明のバイオ社会波動の内部構造については、何も知らないといってよいほどに無知なのである。

人類の文明秩序の基本単位としての文明サイクルは、優秀な社会秩序群を中心として、その外延に明確なSSにまで発達していない多数の国家や諸民族の野性的な生命力、野性的社会群までも含む大集合であろうと考えられる。この場合SSの系統はその巨大なみえない流れのなかの、文明形成要素と能力の系統だと考えられる。

ヨーロッパでも、アジアでも、今まで温帯を中心としている文化の高い優れたSSの系統が、優れた文明を形成している

しかし人は、文明を形成しない部分の巨大な社会集合の流れをも、注視せねばならない。文明的部分は絶えまなくそのエネルギーを消費しつくして亡び、それを各文明圏の辺境の野性的な生命力のプールが、社会的バランスの崩れた時期に補充しているからである。

文明史家の多くが、文明の側に立って文明終末における野蛮民族の侵入と暴力を罵り悲しむのであるが、人類の大局觀に立ってみれば、長い世紀の流れのなかでは、一切の開花を終わった旧い文明が、荒々しく整理されて、新しい混血の新民族(群)が育つことによって、つぎのサイクルの新文明の形成が保証されている。エーゲ文明を荒々しく焼き払った野蛮人の子孫が、ギリシア・ローマ文明を形成したのであり、ローマ帝国を荒々しく破壊し焼き払った野蛮人の子孫が、ヨーロッパ文明をつくったのである。

生命の世界は、その可能性の極限をつくしたあとは、「交代の原則」によって処理されているようだ。それ故に歴史は、つねに新しく今日の幼きもの、野生の民族、踏みにじられている階級、後れたる社会は、ある時期の未来史の主役となるべき幼生にほかならないであろう。

人類社会集団のマクロの進化運動が運載されている文明サイクルの大きいなる中心エネルギーの流れは、社会秩序を生む能力をもった有力な社会集団の流れをなしている。

社会秩序の連環系統のバイオ社会法則的発達と、文明サイクルとの関係を一言にしていえば、一文明サイクルから遊離した社会秩序はなく、社会秩序の系統を中心部分にもたない文明は存在していない。

一文明サイクル(Civilization Cycle = CC)は、標準型の発達の良好な文明では、約4個

の発達段階を異にする社会秩序(Social System = SS)と、正確な時期対応で連動していた。これは $1CC = 4SS$ 型の法則として理解することができる。すべての文明サイクルが4SSであるというのではなく、発達の悪い古代の文明では、そのベータ一期にだけ社会秩序をもっているのが多いが、近代文明になるにつれて、社会秩序の系統的連環の存在がはっきりしてくる。

$1CC = 4SS$ 型の法則

文明サイクルの時期	社会秩序型式	バイオ社会性質	
アルファー期、前半期	No.1型 SS	第1期	SS
〃 〃、後半期	No.2型 SS	文明準備期	SS
ベータ一期、前半期	No.3型 SS	青春開花期	SS
〃 〃、後半期	No.4型 SS	熟成期	SS

現代の物理学では信じにくいくことであるけれど、推定では $1CC = 1600$ 年間は、それを組成している大集合(社会集団、民族集団)の、長期のバイオ社会活力周期のようであり、その四区分時期は、文明サイクルの幼生期、少年期、青年期、熟成期の四期を表現している、とみなすことができるから、No.1型SSは幼生期、No.2型SSは少年期で、この階段までは、よほど天才的で早熟なもの(例えば、ギリシア社会)を除いては独自の創造的文化は生まれてこない。No.3型SSは青春開花期に当たるもので、美術、芸術など若々しく活気ある、文化に優れた社会となり、No.4型SSは、その文明サイクルの最終最高の熟成文化を表現するものとなる。

$1CC = 4SS$ の経験法則は、その文明サイクルを組成している大集合社会の、自然的、物質的にして社会的な大潮流の上に、優秀な能力をもつに至った民族群、社会的集団が、中心エネルギーを形成して、約16世紀の悠久な世紀の間に、幼生から熟成までの発達段階を異にする社会秩序の連環系統をもっているパターンだと考えるのが、最も妥当適切なようである。

SSのシステム・パターン

新しい文明の夜明けが訪れる。それは人類が、はじめて手に入れる新しい、すばらしい知恵の宝だ。

社会の内部からみると、社会の生命活動に基づくバイオ社会的振動の総和は、バイオ社会波動を絶え間なく発生させ、その量子力学的展開は、大きなバイオ社会的スパイラルを生む。

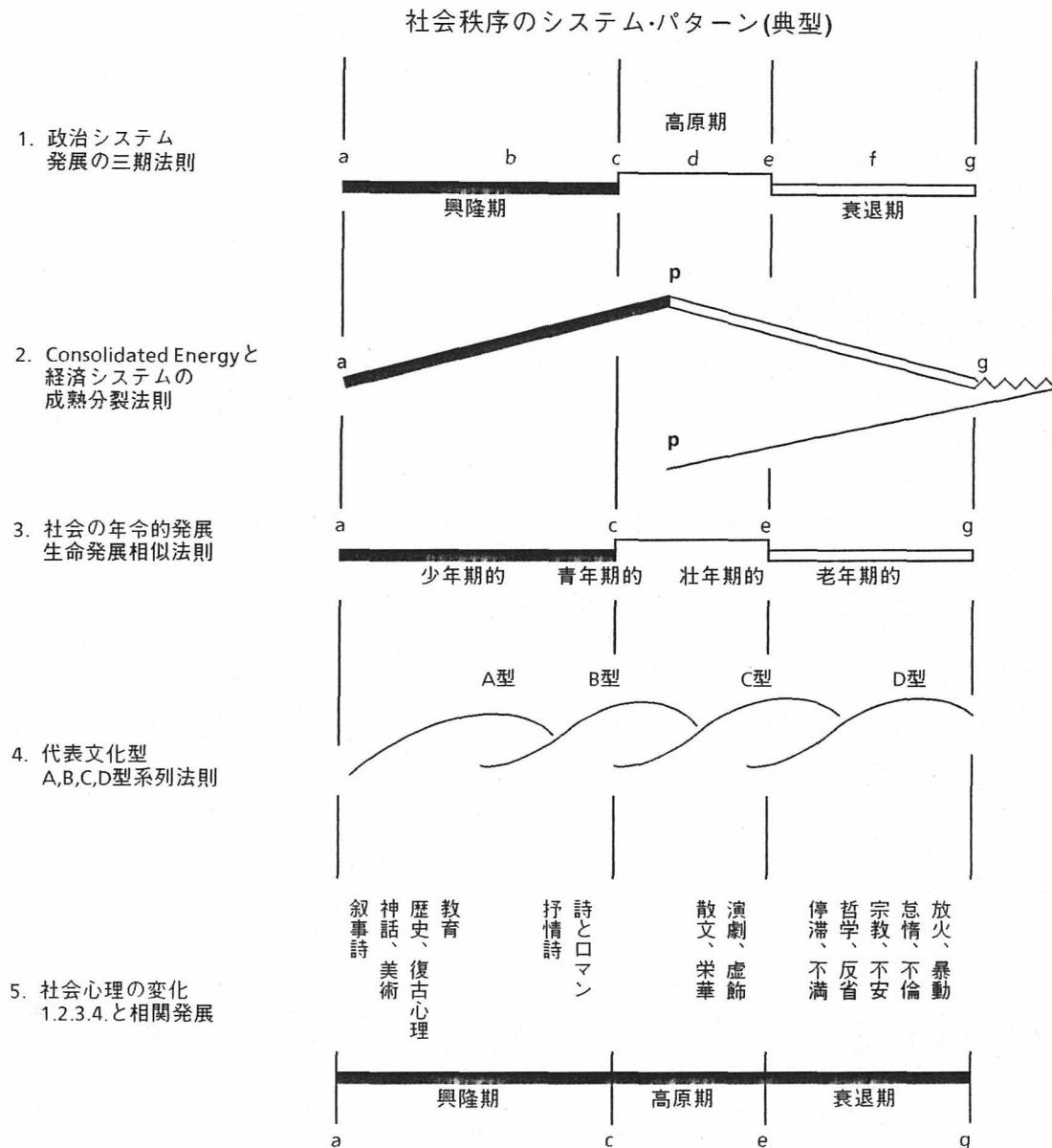
その典型的なものはバイオ社会秩序であり、はじまりと終わりのある、ひとつのエネルギー・サイクルをもっている。あらゆる地上の学問のなかで、これほど不思議で、これほど重要なものは、ほかにはない。過ぎ去ったものがわかり、現在がわかり、これからくるものがわかる。

図におけるaからgに至る各指標点は、発展段階を区分している。SSに共通発展パターンがあるため、このような一切のSSに共通の指標点が打てる。

a点は社会秩序の成立点で、<大化改新>、<明治維新>、<名誉革命>のような場合である。

b点は興隆期の中頃以後の、これからピッチのあがる興隆加速点。

c点は興隆期より高原期への転換点。



d点は高原期の中点。

e点は高原期より衰退期への転換点。

f点は衰亡加速点。

g点は自壊点(破壊革命または内乱、亡国等の点)(なお各点の数字はプラス・マイナス数年の幅で考えるべき時期区分点の中点である)。

あらゆるSSは、それが標準的発展をした場合、社会的統一体としての明白なバイオ・システム・パターンをもっていた。システム・パターンをいうのは、幾つもの基本法則が、あたかもクロスワード・パズルのように、ヨコの時間の流れのなかではバイオ社会的順序をもって、継起のシステムをなすとともに、タテの同じ並行時期には、すべての主要傾向現象がバイオ時期対応の法則によって、正確に相対応して、全体が立体的バイオ社会法則の体系となることを意味している。図はこのバイオ社会法則体系の全体を示し、ヨコは左から右へと流れの時間を、タテは同時期の並行現象を示している。

図では、①政治システム発展の三期法則、②Consolidated Energyと経済システム発展の成熟分裂法則、③社会秩序の生命年令相似発展の法則、④代表文化型のA、B、C、D型系列法則、⑤社会心理の変化法則等の5個の基本法則が、正確に計測された時期区分による「社会秩序の三期平均比率」すなわち興隆期(a-c間)46%、高原期(c-e間)25%、

衰退期(e-g間)29%の平均比率との正確な関連において表現してある。

社会秩序の5個の法則は、それぞれ社会秩序時期に相関連して、時間の流れに沿うて、一定法則的相互関係で、発展し変化する。

人類の社会進化の波動

バイオ社会集合は静態であり、そのバイオ社会の波動現象は動態であるが、法則はその集合がバイオ社会秩序の典型的発展型になったときに、もっともよくバイオ・システム・パターンとしてあらわれている。

いま集合を小から大へと追ってみるとつぎのようになるようである。①個人がまずあって、つぎに②個人の集合が家族のような血縁体になり、③それが地縁的なものや、職業的なものなどの集団になり、④学校とか会社とかいう組織された集団にもなり、⑤それがさらに集合して村とか町とか市とかの集団になり、⑥これが府県単位やその連合のような大きな集まりとなり、⑦やがてそれらが統一的にまとまってひとつの国家となる。

この国家の段階の集合体では、人口統計とか各種経済統計とか、いろんな形で社会量の数量的計測によって、社会の傾向性を抽出することができるが、それらは国家を異にすれば異なるもので、国家の段階ではまだ法則性はあきらかにはでてこない。人間の自由意志が国家を支配しているので、人間の自由意志を超えた客観的法則性はまだあらわれえない。⑧国家が数世紀も典型的に発達すると、⑨バイオ社会秩序が形づくられている。

このバイオ社会秩序の段階で、見事なシステム・パターンがあらわれている。⑩この社会秩序の悠久なときの流れのなかの4個の連続構造が、ひとつの文明サイクルを形づくっている。4個の連続とは、いわば理想的なパターンであって、実際にはいろいろのずれがある。

大文明の800年転換のときに、はじめて定周期となる。ここまで段階の、社会的秩序のなかの法則は、定周期ではなく、社会波動は伸びたり縮んだりするものである。

さて⑪文明サイクルの単位はメソポタミアとか中国とかいうような、地上の各地の地域文明が最初で、これらが東と西でそれぞれ同型正反の波高で⑫東の文明サイクルと、西の文明サイクルに集合し、これが⑬東と西の文明システムを形づくる。このものの波動発展は⑭二重らせん型のクロス・サイクルの発展パターンをつくる。

この説をさらに、進めると、これは人類の波動発展の流れとなるので、二重らせん運動が発展して⑮ホモ・サピエンスのような現在型人類の波動発展になるのではないか、とも想像されるわけで、それは結局もっと大きくなれば⑯悠遠な時空のなかの生命の発展法則になるのではないか、と空想の羽を伸ばすのである。

社会量の組織的集合と社会進化法則

番号 説明	人間の集合段階		
1	人間個人		
2	個人の集合(血縁体)		
3	各種小集団の形成		
4	組織集団の形成		
5	組織集団の集合		
6	地域的大集団の形成		
7	国家の形成		
8	国家の典型的成長	社会法則	備 考
9	社会秩序の形成	社会秩序のシステム・パターン	生命型発展相関法則
10	社会秩序の集合	1CC = 4SS	〃
11	文明サイクルの形成(各地域)	文明サイクルの生態的パターン	自然法則的周期をもつ
12	文明サイクルの集合(東・西2群)	〃	〃
13	東と西の2つの文明システムの形成と発展	二重らせん型	〃
14	東西文明のクロスサイクルの波動	人類の創造力開発のマクロの進化運動か	〃
15	人類現在型(ホモ・サピエンス)の進化運動	n.a.	n.a.
16	悠遠な時空のなかの生命の発展法則		

人類の社会進化パターン

地球上には多くのすでに亡んだ史的文明がある。これらのすべてを詳細に科学的に、それぞれの存在の時間、空間を分析してみると、あらゆる大文明は約1600年間(±約50年)の定周期をもっていることが発見される。確実に存在した文明周期年数が不明確な場合でも、この定周期の周期表のなかに入れてみると、史的に消えている部分まで、推測できるほどである。

それぞれの1600年周期は、質的に二等分して分析することができる。約800年間ぐらいの中世的時期と、ほぼ同じ数年の文明期である。この800年転換は、平均数であって、歴史の実測ではどちらも700~900年の幅のなかにある。中世的時期を低調波とよび、文明的時期を高調波と名づけた。時間的分析のため、200年幅にて、低調波を4期に分け、高調波を4期に分け、各分割点に指標O·P·Q·R·S·T·U·V·Wを付した。W点は旧文明の崩壊開始点であるが、それは直ちにつぎの新文明の理論上の始点と認められるので、W点はO点と重なる同時点となる。

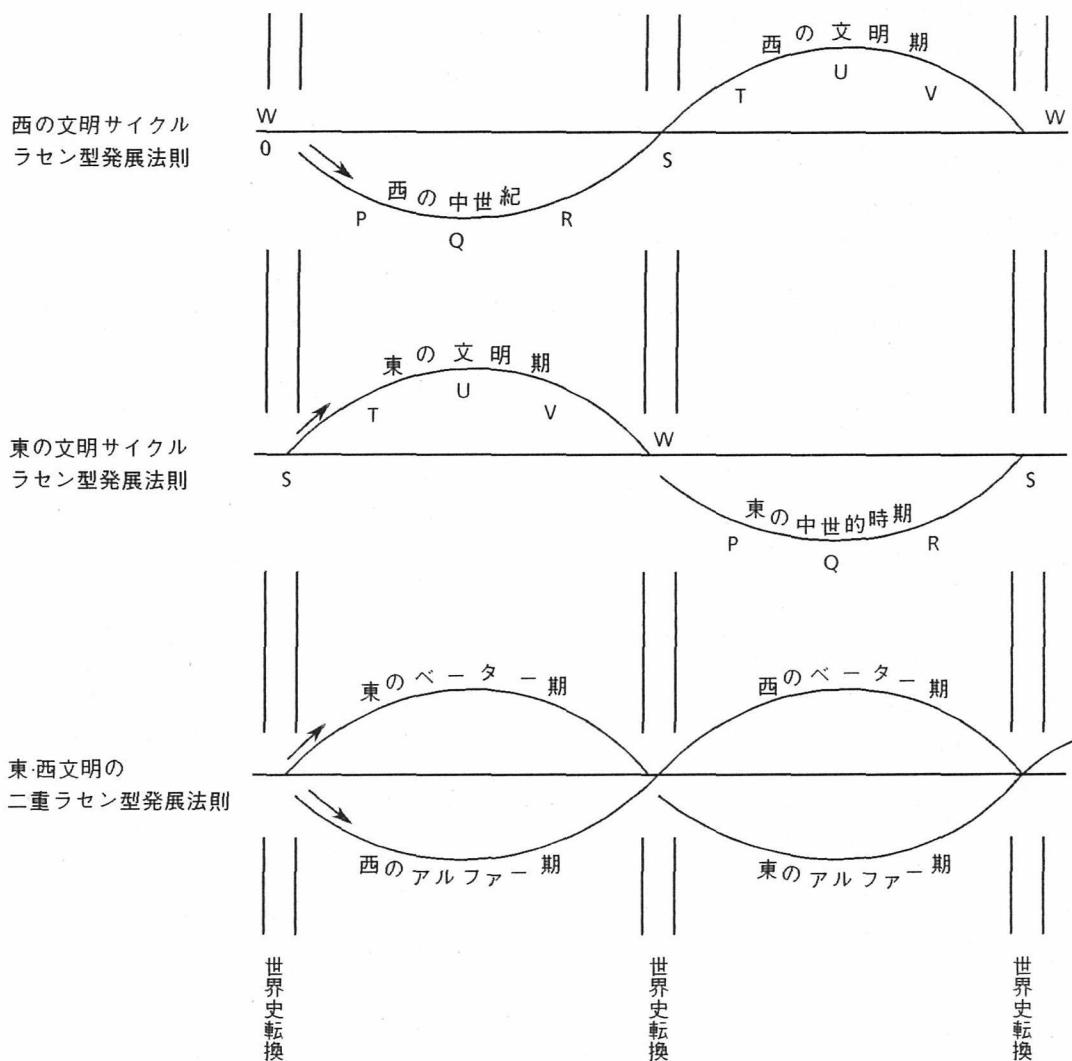
中近東が東西文明の接点であることは、ギリシアの昔から、ヘロドトスの『歴史』にも指摘されたところである。さて、それぞれの個別文明は、一個の例外なく、文明周期表の理論値に一致した。別の言葉で言えば、理論上の8世紀高低波に修正整合されて説明できる確実な配列を示した。この周期はあらゆる個別文明において同じであったが、メソポタミア文明以東の諸文明は、文明の興亡周期がまったく同型であり、これを東の文明サイクルのらせん型発展法則と名づけた。

他方においてエジプト文明、エーゲ文明、ギリシア・ローマ文明、ヨーロッパ文明等は文明の興亡周期がまったく同型で、東の文明とは別の正反対の高低周期を示したの

で、西の文明サイクルのらせん型発展法則と名づけた。

西の文明サイクルと、東の文明サイクルは、波長同じで高低周期は、正反対であった。つぎに、低調波約8世紀間をアルファ一期とし、高調波約8世紀間をベータ一期と名づけると、ひとつの文明周期約1600年間は、アルファ一期約800年間と、ベータ一期約800年間で組成されていることになる。

人類の東・西文明系の交代発展のシステム・パターン



注 0-S間は8世紀間隔。

S-W間も8世紀間隔。

世界史転換期は約7世紀間隔をおいて約1世紀間。

東・西文明は裏返し周期だったので、西のアルファ一期は必ず東のベータ一期と並行し、西のベータ一期は必ず東のアルファ一期と並行する。この関係は、人類6000年間の史的文明期の全時期において、100%の立証をもっていることが留意された。この事実は確実な内的要因によっても立証される。

ベータ一期の終末のW点から約1世紀間は、全世界の文明史上、1個の例外なく、それまで1600年間存在した大文明の崩壊期(分解期)であった。W点の誤差率は2%以内でプラス・マイナス25年位であった。文明崩壊はその文明を担ってきた文明化集団の、生命エネルギー(その文明の包括する諸民族、諸国家のヴァイタリティ、政治経済力、軍事力を含む)の急激な減衰分解、崩壊を意味していた。

この文明崩壊の約1世紀間は、その地域ではまったくの暗黒時代となる。このときの一方の文明化社会群の全面的崩壊(例えば5世紀のローマ文明崩壊、13世紀のアジア文明崩壊)は、それに隣接する社会群との相前後する猛烈な摩擦現象(フリクション)を引き起こす。したがってその時期の破壊的影響力は全世界に波及する。世界史はここで、すっかり転換する。このゆえにこの時期を世界史転換期と名づけた。

文明サイクルが16世紀周期であるから、文明崩壊はその文明系にとっては、1600年間の最後の分解時期であり、1600年間に1回である。実例では東の文明では西暦1200~1300年すなわち13世紀の文明崩壊(サラセン文明の滅亡、5~13世紀中国文明の滅亡、インドの没落、日本王朝文明の滅亡、中央アジア文明の滅亡)がそれであり、その1600年間は前400~前300年すなわち前4世紀の中国、日本、インド、ペルシアにわたるアジア古代諸文明の崩壊と史的大転換がそれである。

西の文明では400~500年すなわち5世紀(ローマ帝国滅亡とゲルマン民族群大移動の欧洲中世開始期)がそれであり、その1600年前は、前1200~前1100年すなわち前12世紀のエーゲ文明の滅亡とアーリア系諸民族の大移動の時代に当たっている。これらの周期は1600年間隔でそれぞれのいっそう古い時代へと、確実にさかのぼることができる。

地球上における東西の文明空間は、各サイクル(16世紀定周期)ごとに、その中心地が移動している。文明波動は人類の大集団の社会生命力の長周期波動とみなすことができるようであり、それが定周期であるとすれば、何らかの宇宙・地球的波動周期に、その原因をもつものとみなさねばならない。このことは物質界の周期の基本である、原素周期率(8.16)の長周期のもの(800・1600)に深く関連している。

東西ふたつの文明系は、DNAの二重らせん構造と同じに、二重らせん型に組成される構造に類推しうる統一組成をもっていた。しかし二重らせん構造は、二重らせん間の同時期的に併行運動する地球規模の連絡構造が成立すれば、正しく作動しうるのである。その連絡構造は人類史上はじめて20世紀後半に成立した。したがって今後の人類の文明向上、社会進化には新しい未来が期待される。

東西ふたつの文明系は、二重らせんとして作動しうる、あらゆる内在条件を内包していることがわかった。過去の不十分な条件下ですら立証できるほどである。

東西交通が広く成立したのは、16世紀頃であり、地球が電波と航空路とマスコミなどで、緊密に結ばれたのは20世紀後半においてである。

いわば20世紀後半にして、はじめて人類の地上生活に、東西文明の二重らせん構造の真の同時連絡作動が成立したということができる。このことのもつ意味は、驚異的に重大であると思われる。あたかも20世紀末から21世紀は、新しく予期される世界史転換期に当たり、5世紀以後1600年間にわたるヨーロッパ文明サイクルが、そのアルファ一期の中世紀とルネッサンス以後の青春期、18世紀以後の工業化文明を経て、活力衰亡と社会的苦悩の文明行き詰まりに直面する重大時期に、地球上に、史上はじめての「世界文明の二重らせん構造」の連絡構造の成立をみたのである。

二重らせん構造とは、発展と進歩のための生命型基本構造にほかならない。そこにはトータルなバランスが、各部分に内在している。いま人類世界が直面せねばならない文明の危機は、西の文明エネルギーの大減衰と、東の文明エネルギーの上げ潮である。また開発途上地域の人口爆発と、旧文明地域の核兵器恐怖の苦悩が重なり、ひとたび西の文明崩壊の核戦争が発生すれば、核兵器で死亡する数億人にも増して、人口激増の開発途上国地域では、食糧不足による餓死者は数億人を超えるかもしれない。

このような危機の時期に東西間の眼にみえない文明バランスに、二重らせん構造の発見が史上はじめてはじまつたということは、神の摂理に近いものを感じさせる。

文明法則史学の基本理論

人類の歴史はTSMAの4要素で構成されている。Tは時間(Time)、Sは空間(Space)、Mは人間(Man)とそれに関連する物質(Matter)を指し、AはMによっておこる活動(Activities)及び事件(Affairs)を指している。

いま横軸にT(時間)をとり、タテ軸にS(空間)をとると、その不斷の生活活動のゆえに振動状態にあるMAの、時間軸に沿う進行は、何らかの形の波動型曲線となる。この波動型曲線は、いろいろの形で認識することができる。個人にとっては生滅の曲線、国家にとっては興亡の曲線、社会にとっては世代の交代、SSの連環、文明の交代のように……。

TSを小にとれば、歴史の曲線のうちの切断部分を直線的視野のなかにおさめることもできるが、TSを拡大すれば、歴史はすべて何らかの曲線である。したがって歴史の一切の直線的認識は、分析的視野の所産に過ぎず、大いなる歴史の流れはすべて曲線である。したがって歴史の流れのなかで、世に不死の人間はなく、興亡しない国家はなく、波動変化しない社会はなく、分解しない文明社会はありえない。

TSMAの全体的相関が、社会秩序のような大きさのものになると、Tは数世紀、Sは社会秩序に相応する広い空間(地域)、Mは大量の人間と大量の物質、Aはそれらの活発な活動波動となり、その成型は数世紀のエネルギーをもつバイオ社会波の曲線となる。

さらに長大周期の文明波動ともなると、TSMAのそれぞれの量は、文明に相応する巨大量となり、その長期波動は、立体的ならせん型曲線となって進行するパターンになる。

TSMAは相関連しているから、すべて相関関係において認識されねばならない。

TSは時空の法則性につながり、MAは自由意志とその自由活動をなす人間の非法則性につながるから、MAを主体とする型の史学には法則性は求めがたい。王朝の歴史、個人の歴史、事件の歴史等には、教訓と面白味はあっても。法則を求めるべきではない。

法則があらわれるのはTSMAの相関構造のなかで、TSがMAの任意性を圧倒する巨大量として参加する限界点以上の場合に限られる。

なおMが人間としてそれに関連する物質の両者を含んでいるのは、歴史はそのいずれを欠いても成り立たないことを意味している。またAがMによっておこる活動及び事件の両者を含んでいるのは、人間の活動と物的環境の活動の両者と、それに加えてそれによっておこる人間による事件と、物的環境による事件のすべてが、法則史学における歴史内容に含まれていることを示し、それらの大きな宇宙的・自然的条件のなかに、人類の社会的变化と進化のパターンが発見されることを表示している。